

一 テーマ

自ら関わり、地域のよさを実感し、自己の生き方につながる総合的な学習の時間の価値を見いだしていく

二 テーマ設定の理由

昨年度は「地域のよさを実感し、自ら関わろうとする総合的な学習の時間のあり方」という研究テーマだった。しかし、昨年度はコロナウイルス感染拡大に伴い、地域と関わって学習を進めることがなかなかできなかった。そこで、今年度はコロナ禍でも地域との結びつきを大切に、学習を進める方法を模索したいと考えた。また、委員の先生方から、「子ども達が進んで探究する姿を大事にしたい」という意見も多かったので「自ら関わる」というキーワードは今年度も重要視しながら研究を行った。

三 研究の経過

5月6日（木）打ち合わせ会

7月13日（火）神科小学校事前授業研究会教育課程研究Ⅱについて

9月8日（水）教育課程研究協議会

10月15日（金）各校の中間報告会

11月29日（月）総委員会

四 研究の内容（各校の実践から）

1 A中学校

A中学校の総合的な学習の時間では、「コスモス大学」として十数講座を開設し、地域の講師を招き、年12時間の活動を行っている。新型コロナウイルスの拡大前は、地域からも受講生を募り行っていたが、ここ2年は活動自体が行えない状況になっており、その他の総合的な学習の時間も含め、進め方は学年の裁量によるところも大きい。そこで、「コスモス大学」を含め、中心となる活動を大きく4つに分けて行っていくのはいかがでしょうかと考えている。

2つ目は、「歌声探究活動」である。A中学校では毎年文化祭で合唱コンクールが行われているが、今年度は文化祭と同日開催が難しく、4週間程度遅らせて行った。その代わりに、セレスホール（上田市丸子文化会館）をお借りして保護者も制限のうえ観ていただき、開催することができた。クラス、学年を越えて聞き合ったりアドバイスをしあったりしながら、例年時間をかけて練習している。また、新型コロナウイルスの影響で、大人数で歌うこともなかなか難しい状況ではあるが、コンクール以外での合唱も大切に行っている。そこで、「歌声探究活動」として、自分たちの合唱を高めるために自分たちで考え、振り返る時間を設けられるとよいと考える。

3つ目は、「キャリア教育」である。中学校ならどこも行っているが、これからAIが発達し、今後10～20年で半数の仕事がなくなるかもしれないと言われている現在で、キャリア教育の果たす役割はさらに大きくなってきている。また、本校2学年では、学年での宿泊学習を行っておらず、代わりに職場体験学習があり、学年行事としては最大の活動である。そこに主体的に向かっていき、それを踏まえて自分の進路に向けて考えていく時間、仲間の考えを聞いて自分の考えを深める時間を多くとっていく必要があると考える。

4つ目は「情報教育」である。上田市では1人1台のクロームブックが貸し出され、使い始めたところである。教科の学習では、問題演習や意見の集約、調べ学習等で使用している場面が見られる。これからさらに活用の幅が広がっていくことになるのだが、機器自体の使い方もそうだが、常にインターネットを経由し

て使用する上での情報モラルについても学習が必要である。技術科の時間でも扱っているが、文房具の1つとして中学生が使用していくためには時間が必要だと考える。

具体的な活動内容は吟味していかないといけないが、どの活動に対しても自ら課題を見つけ、自ら考える時間、仲間の考えにふれたり協働的にとりくんだりする時間を設け、学び方や考え方を深めていける時間として設定できるのが理想である。

- 1 学年 ・コスモス大学 ・歌声探究活動（発声、ブレス）
・キャリア教育（職業調査、適正検査） ・情報教育（文章作成、情報モラル）
- 2 学年 ・コスモス大学 ・歌声探究活動（ハーモニー）
・キャリア教育（はたらくとは） ・情報教育（プレゼン作成、情報モラル）
- 3 学年 ・コスモス大学 ・歌声探究活動（曲想表現）
・キャリア教育（高校調べ、進路学習） ・情報教育（情報発信の仕方、情報モラル）

.....

2 B小学校（4年生）

「地域のよさを実感し、自ら関わろうとする総合的な学習の時間のあり方」のテーマの元、

本年度取り組んだ実践報告

例年、本校の4年生は秋の運動会で地域で長い間継承されている「義民太鼓」を発表しています。1学期から義民太鼓保存会の方に指導を受け、何回も練習を重ね、本番で披露します。子どもたちも、「4年生になれば太鼓ができる」と期待したり、過去の先輩方の格好いい姿に憧れを抱いていたりする子もいます。太鼓の運搬や設置等、お家の方にもご協力をいただき、運動会での発表に至った学習の足跡をまとめました。



主な学習の足跡

5月18日（火）・・・初めての練習

村の武道館へ行き、講師の宮入さんに、太鼓のことはもちろん、礼儀のことや大事にしたいことを話していただきました。打ち方を教えてもらい、実際にみんなで叩きます。ある時、全員の気持ちが合って、太鼓の音がピタッと揃って止まりました。あの一瞬・・・感激しました。息が合うとはこのことなんだ、と実感しました。

6月3日（木）・・・2回目の練習

すぐに太鼓の位置について、いろいろな叩き方を習いました。「流れ」という場所を移動しながら叩く打ち方も新たにできるようになりました。1回目の練習がだいぶ土台になっており、やはりみんなの気持ちが揃うと動きも音も揃います。

その後も夏休みを挟み8回練習をして、運動会前日。初めて校庭でリハーサルを迎えます。

【子どもたちの運動会への意気込み】

・太鼓が一番むずかしいので、最初はたたくのがむずかしかったけれど、だんだんうまくなって全部たたく

るようになりました。運動会が楽しみです。

- ・運動会での目標はやはり、太鼓です。理由は、太鼓は1年生になる前から毎年見てきて、私は自分もこんなふうになりたいな、と思ったからです。
- ・練習の途中で、指の皮がむけたから、がんばったあかしだと思いました。太鼓では練習通り、声を大きく、手を上げるところは、しっかり上げたいです。
- ・がんばりたいのは、太鼓です。なぜなら、短きより走などは、どの学年でもやるけれど、太鼓は4年生しかやらないからです。本番は見てくれている人のおなかまで音がひびくような演奏にしたいです。

9月19日（日）・・・運動会本番

【運動会を終えて】

- ・義民太鼓は一番運動会でやりたかった種目なので、頑張りました。太鼓は楽しいし、気持ちがよくなるし、みんなと一つになっている感じでとてもよかったです。
- ・休憩が終わると、私達4年生が披露する義民太鼓です。他の学年やお家の方達の前で披露するのは初めてだったので、緊張しました。みんな私達の演奏に耳を傾けていると思うと、そんな緊張はすぐに吹き飛んでしまいました。（中略）無事に演奏が出来てよかったです。
- ・最後の出番は義民太鼓です。夏休み前から練習してきました。運動会で成功するために頑張りました。家でも繰り返し何度も練習しました。いよいよ本番です。ドキドキしました。みんなが心を一つに合わせて太鼓を打って、素晴らしい音を出せました。最後には、大勢の人から拍手をもらうことができました。

考 察

自分たちの地域に昔から伝わる義民太鼓。子どもたちも義民太鼓の練習を通し、はじめは太鼓に対して「うまく叩けない」「よく分からない」という印象をもった子もいました。しかし、練習を重ね、できなかった部分ができるようになり、みんなと音が揃ってくる喜び



を味わううちに、子どもたちの太鼓に対する気持ちも前向きに変わってきました。武道館での練習以外にも、学校で練習することもありましたが、できない部分を教えあったり、一緒に練習したりする姿も見られ、みんなで作るんだ、という気持ちも高まったと思います。

指導してくださる宮入さんに褒められることで、さらにやる気をもった子もいます。運動会前日に「緊張を楽しんでください！！」というアドバイスをいただいたことで、安心して本番に臨め、個々の達成感を味わえました。

運動会で義民太鼓に触れるという機会から、自分たちの地域に伝わる義民太鼓の良さや素晴らしさに気づけたこと、またさまざまな方との関わりの中で、自分で目標をもって自分から進んで練習し、前向きに取り組めたことは大きな学びとなりました。子どもたちが味わった一体感は大きな財産になると思います。義民太鼓の学習は一段落しましたが、今後もさまざまな学習を通して、「地域のよさを実感し、自ら関わろうとする子どもたち」を育てていきたいです。

.....

3 C小学校（4年生）

単元名「産川を発信 民話『小泉小太郎』を通して」

（1）単元設定の理由

1学期は、「産川に行きたい」という子どもの声から、石探し、生き物探し、ごみ拾い、水切りの4つのグループに分かれて、産川に関わってきた。産川の課題について考えたときに「ゴミが多すぎる。」「ゴミを拾ってもきりがない。」という課題があがってきて、「産川を知らせよう。」という新たな課題が出てきた。

教師は、地域素材の教材研究を続け産川という名前の由来となった民話「小泉小太郎」に出会った。自らが、関わってきた産川にそんな由来があったのかという驚きと感動を子どもと味わいたいと考えたと同時に、きっと子どもたちも民話を知らせたいと思うだろう感じた。民話を語り継ぐ語り手の方や、海野町の犀の角で劇をされた方など、地域の方々とも関わることができるという良さもあった。そして、子どもたちが主体的に活動に取り組める題材であると考えため、本単元を設定した。



（2）活動の経過

8月

- ・民話「小泉小太郎」のお話を担任の読み聞かせにより知る。
- ・犀の角の方が演じた「小泉小太郎」劇を見て、自分たちならではの劇を制作することが決まる。



9月

- ・民話「小泉小太郎」について調べ学習をする。
- ・劇に出てくる蛇骨石を産川に探しに行く。

10月

- ・語り手の稲垣勇一さんにお越しいただき、民話「小泉小太郎」を聞く。
- ・より分かりやすい劇づくりのために「演劇」、「背景画」、「道具作り」、「音作り」の4つのグループに分かれて劇づくりが進む。



11～12月 劇づくり

11月18日 犀の角のスタッフの方（石坂先生）にお越しいただき、劇づくりのアドバイスを頂く。

【演劇】・メンバーの人数が少ないながらも、セリフを暗記し、劇練習に励んでいる。衣装も考え始めている。



【背景画】・大きな面積に着色すること、大量の色づくりに苦戦していたが、グループ内で分担し絵の具や水の量の調整にも慣れてきた。



【道具作り】・大蛇を制作している。初めは、女子と男子の意見が合わずグループ活動が進まないこともあったが、徐々に互いの意見を受け入れ、試行錯誤しながらも一つの物を創り上げようとする姿が見られる。



【音作り】・初めは Youtube から動画を探して録音していたが、石坂先生に「自然の物を生かしたらどうか。」というアドバイスをいただいてから、外の枯れ葉で萩の枝が折れる音を録ったり、氷を割ってガラスが割れる音を録ったりと、お話の場面にあった音を自分たちの納得がいくまで粘り強く追究する姿があった。



今後の活動の予定

子どもたちは、2月18日の最後の授業参観で保護者の方に自分たちの頑張りを見てほしい、劇づくりでお世話になった方を招待したい、川辺小の他のクラスで産川の活動をしている学級に知らせたいという願いを持っている。

発表に向けて、招待状を作成したり、校内で呼びかけをしたりなどの活動も行っていく。また、本単元の子どもたちの中心の思い「産川について知らせたい」という思いが達成できるよう、劇を見てもらったお客さんの感想などから、子どもたちの達成感や自己の頑張りにも目を向けられるようにしていきたい。

(3) 成果と課題

・教師自身が「総合的な学習の時間」とは、何か。児童にふさわしい探求課題は何か。と考えながら、活動してきた。子どもたちの「やってみたい」という思いと地域素材を融合し、発表に向けて活動に取り組むことができたのは、子どもにとってふさわしい課題を設定することができたと感じている。

・様々な個性を持った子どもたちがいる中、グループ活動に取り組みながらも学級では劇という一つの作品を創り上げていくことは、1人1人の良さや得意を生かしつつ、協働的な活動や対話が多く生まれる場面があったことからクラスの団結感を生み出すことができた。

・活動ありきになってしまわないよう、振り返りをする中で、一時間、一単元で自分ができるようになったこと、成長したことに自分で気づくことができるようにしていきたい。

・グループ活動では、個々の児童が取り組みたいことを追究しやすい一方、教師一人ではなかなか指導が行き届かないと感じる場面もあった。

.....

4 D小学校（5年生）

① 今年度の総合的な学習の時間 学習内容

5年生は社会科の授業で「米づくり」について学習する。本校では、5年生が学区内にある高校の農業科と交流しながら、米や野菜の栽培体験をしている。今年度も引き続きコロナウイルス感染症の影響で、交流ができないこともあったが、社会科で学んだことを実際に体験させてもらえるよい機会となった。

② 活動の経過

1学期 開始式 田植え

素足で田んぼに入り、一人ひとり苗を植えた。田植を機械で行っているのを見たことがある子どもはいたが、手で田植をするのは全員がはじめてだった。



2学期 前半

本来は、大根の栽培を行う予定だったが、コロナウイルス感染症の影響で交流ができなくなりました。この頃、社会科の学習で田んぼの用水路や排水路のしくみについて学んだので、自分達が田植をした田んぼではどうやって水の管理をしているか見に行った。

2学期 後半 稲刈り・脱穀

高校生に稲刈り鎌を使った稲刈りの仕方を教えてもらい、1束ずつ鎌で刈り取った。その後、稲をまとめて紐でしばり、はぜにかけた。また、脱穀では、現代の機械を使うだけでなく、千歯こきのような昔の道具も使って脱穀する体験ができた。



2学期 後半 感謝の会

高校生との交流では、高校生が毎回、活動の内容を説明するためにスライドを準備して丁寧に説明してくれたり、実際に体験を行うときは優しく手を貸してくれたりしていた。そんな高校生に感謝の気持ちを伝えるために、小学生主催で感謝の会を行った。今回は、子ども達が一人一役の役割を担当し、子ども達で会を運営することができた。

③ 成果と課題

・社会科の学習で教科書から学んだことを実際に体験することができ、子ども達から実体験をもとにしたつぶやきや深い問いがうまれた。

・普段、地域の高校生と交流する機会はないが、農業体験を通して異年齢交流ができたことは、小学生にと

っても高校生にとってもプラスになった。小学生は「あんな高校生になりたい」と憧れを抱いており、高校生は相手の（子ども達の）興味・関心を引き出すためにどんな説明をすればいいか考えるよい機会になったようだ。また、1年間、小学生と高校生が決められた班で活動を継続したことにより、充実した交流ができた。

- ・高校生に教えてもらったりやってもらったりする場面が多く、子ども達が自発的に活動する機会を設けることが難しかった。
- ・今年度は、4月のうちに総合的な学習の時間の年間計画を具体的に立てられなかった。子どもの反応や意識にも左右されるが、教師がある程度見通しを持っていないと思うように学習が進まないと痛感した。

.....

5 E小学校（4年生）

整理・分析の場面で子どもが主体的に動き出すための学習環境づくり

授業づくり「模造紙に思う存分書き、自分の活動のよさを味わってほしい」

自校のホタル池にホタルを増やすため、ホタルの里（2カ所）に調査に行った4年生の子ども達。本時は、自分が見てきたことを模造紙にまとめる活動を行うことにした。そこで、子ども達が自分から書きたいと思えるような学習環境づくりを課題として授業づくりを行った。

①グループで模造紙に書く。②場所ごとに模造紙を分けてかく。③個人がジャムボードに書き込み、共有。以上の3つの方法をまず考えた。①は、班の人と話し、全員が書き込めるスペースがあるが、全体で共有するときにいくつも模造紙が出来てしまう。②は、全体で共有するときに見やすいが、全員で書くには狭すぎて書けない人が出る可能性がある。③は、共有しやすいが、書くスペースが狭いし、絵が描きづらい。どの方法もよいところと悪いところがあったが②の方法に工夫を加えて行うことにした。

場所ごとに模造紙を分け、子どもが自分の好きな場所を選べるようにした。また、模造紙にみんなで書けない場合の対策として、別の紙に書いて後から貼ってもいいことにした。模造紙をつなげて大きくして書くことも予想し、模造紙は多めに用意した。

さらに、主体的に動き出すための手立てとして、ホタルの里での活動のビデオを見せたり、マジック、画用紙、シールなどを好きに使えるようにしたりもした。



子どもの反応

活動のビデオを見ると、「この川でHくんイモリ取ったんだよな。」「ここは、けっこう浅かったんだよな。」と話し始める子ども達。自分たちの活動を思い出してきたようだった。

活動が始まると、友達と話しながら、「そういえばここに竹があつてさ。」「ここには、小さい川もあつたよ。」と調べたことをどんどん模造紙に書いていった。

授業の反省

「パックテストの見方を調べて、水の色を変えたいな。」とタブレットで調べたいと言ってきた子どもが数人いた。私は、タブレットを使うと今日のねらいが達成されないように思え、悩んだが、タブレットを使うことを許可した。その結果、タブレットは、その子ども達の追究を止めてしまうことなく、パックテストについてをまとめるときの手助けになっていた。

最後の振り返りで「最初は、なに書こうか分からなかったけど、ビデオを見たり、友達と話したりしたら、書きたいことがたくさんでてきてすごいと思った。」と話した子どもがいた。一つの模造紙に友達と話しながら一緒にまとめていくことは、自分の活動を振り返り、言語活動を充実させる上で有効な学習環境作りだと感じた。

.....

6 F 小学校（5年生）

「アサギマダラプロジェクト ～子どもと共に夢を追いかけて～」

1 プロジェクトの始まり

4月、右の新聞記事を目にした5年4組の子は、「自分たちもアサギマダラを見たい」、「玄蕃山へ行きたい」と願い、玄蕃山へ向かった。そこで、アサギマダラの美しさに魅了される発起人の土屋さん、子どもに美しい蝶を見せたいと願う自治会長の小林さんの話を聞き、「自分たちもアサギマダラを呼びたい」、「できることをしたい」と子どもたちは願い、プロジェクトが始まった。



2 素材研究と題材の価値設定および年間計画作成

そこから担任の私もアサギマダラについて素材研究を始める。上田市上塩尻地区にあるゆうすげと蝶の里の清水さんにお話を伺うと、次のようにおっしゃった。

「地域の子どもたちが自由に遊んだり、この場所で自然観察をできたりするようにこの場所を作った」

「アサギマダラは、10年前には500頭はきていた。しかし、今では50頭ほど。地球温暖化の影響が

大きい。なんとかしないと、本当に生き物や人間にとっても住みにくい世の中になってしまうよ」この

「きれいな蝶が舞うような玄蕃山になってほしい、コロナ禍で我慢ばかりの子どもたちにとって、少しでも外に出たり、明るい話題になったりしたらうれしい」（長島地区自治会長 小林さん）「上田にはオオムラサキなどきれいな蝶がよく飛んでいる。耕作放棄地にするぐらいなら、蝶が飛来し、子どもも集まるような空間をつくりたい」（ゆうすげと蝶の里 清水さん）

飛来する蝶の美しさに魅了されながらも、それ以上に子どもたちや地域に還元したいと願うお二人。小林さんや土屋さんに会うと、K児が「思いがすごい」とふりかえりに記したように、子どもたちは長島地区の活動に心惹かれ、自分たちも参画したいと願った。そんな子どもたちが、アサギマダラの活動や栽培活動を通じて、ふるさと上田のよさを五感を通して感じると共に、そのよさをいかす人々の思いや営み、森林を守る取り組みの課題等にふれ、自分を豊かにし、これからの人生の財産にしてほしいと願う。数千キロの旅をしながらフジバカマの蜜を吸う渡り蝶、アサギマダラ。長島でもこの春数頭の飛来が確認され、'ゆうすげと蝶の里'でも50頭以上飛来したという。しかし、清水さんの話によるとこの数は激減しているという。以前は、秋には500頭以上の飛来が確認されたアサギマダラ。激減の理由は地球温暖化だという。折しも、米作りの指導者の中村さんも次のように仰った。「昨年は温暖化による異常気象でイネの生育が悪く、米の品質が落ちてしまった。昔から良質な米が収穫できるここでもやっぱり難しいね、温暖化は。」と。子どもたちにとって地球温暖化は遠い世界の話であろう。そんな子どもたちが、身近なふるさとでの実体験を通して地球温暖化の課題に向き合ったときに、地球規模の課題について自ら新たな知を紡いだり、今後の自分の生き方を見つめ直すきっかけとしたりする一年になるであろう。



話を聞き、子どもたちにとっても大きな学びの機会となると考え、題材の価値を次のように据えた。

清水さんに会ってから、私自身も「早くアサギマダラを見てみたい」という思いが募った。宮田村、青木村、小諸市、霧ヶ峰高原…。様々な場所に出向いてはアサギマダラの姿を追い求め、詳しい方の話を聞いた。

初めてアサギマダラにであったのは、夏休み中の霧ヶ峰高原。ヒヨドリバナにそっととまり吸蜜する姿はなんとも美しく、いつのまにか自分の周りにも何人の方が群がって見とれていた。また、宮田村では百頭以上の乱舞を目にした。圧巻の世界。こんな世界を子どもたちと味わいたいと心から思う自分がいた。また、出会って話を聞くと、どの方も「地域を盛り上げたい」、「子どもたちに自然にふれてほしい」といった熱い思いを抱いていた。アサギマダラを通して広がる可能性を大きく感じる自分がいた。



3 子どもたちの様子より

玄蕃山へ出かけて以降、アサギマダラの生態や飛行情報などをもっと知りたいと考えた子どもたち、そこで国語の書く単元をつかって、アサギマダラについて調査し、クラスの仲間に伝え合う報告書作りを行った。アサギマダラの特長や、育ち方、飛行、天敵に好きな食草などを調べてまとめると共に、上田市内「ゆうすげと蝶の里」でもアサギマダラを呼ぶ活動をしている場所があることがわかってきた。そこで現地に行って、どうしたら呼べるのか調べたいと願いをもった。コロナウィルスの感染状況により残念ながら現地へ出向くことはできなかったが、清水さんに来ていただき、「自然のフジバカマにアサギマダラがよくくると」「目立つところや日当たりのいいところにフジバカマを植えるといいが、それ以外の場所にも植えてみて試してみるといいということ」「天敵もいるが、殺さずに自然界のバランスを保つことも大切であるということ」「他の蝶の食草も植えるといろいろな蝶も観察できていいということ」「アサギマダラは温暖化で減っているということ」などがわかった。この話やもう一回来ていただいた清水さんの話を整理分析し、アサギマダラを呼ぶには5つの活動が必要だと考え、下記のように現在の活動は進んでいる。



チーム	現在の様子
場所決めチーム	・校内三か所にフジバカマを植える。(校庭南側・昇降口前・北校舎と中校舎の間)
アサギマダラの食草チーム	・フジバカマを種からと、株分けをしてもらって育てる。 ・フジバカマ以外にアサギマダラが好きなキジョラン、ミカエリソウを植える。
他の蝶の食草チーム	・百日草とカタバミ、バーベナ、ツマグロヒョウモンを植える
フジバカマを守るチーム	・フジバカマを植えたらその周りにロープで柵を作る。 ・フジバカマが来ることをアピールする看板も川辺地区の看板を参考にして作る。
天敵対策チーム	・天敵はあまり気にせず、共生できるよう殺さない。

秋になり、玄蕃山へ向かう。到着する前の急坂、子どもたちはフジバカマ畑へ駆け出した。「いたいた!」「こっちだよ」「きれい」「こんなに近づいても逃げないよ」アサギマダラの美しさに魅了される子どもたち。四頭のアサギマダラを追いかけて、「学校にも呼びたい」という願いを強くする子どもたちであった。



4 今後の活動の見通し

冬の間は、フジバカマを種から教室で育て、その育てた苗を春になったところで、玄蕃山や学校にも植える。また、その他の蝶の食草の栽培活動も進め、様々な蝶も呼びたいと考えている。アサギマダラを呼んだ後は、地域の方にも見ていただきたいという願いをもっているため、アサギマダラを呼ぶ活動を進めながら、地域へ拓いていく活動を今後展開していきたい。また、アサギマダラに出会った後には清水さんから話していただいた、地球温暖化についても身近な課題として課題意識をもつだろう。その意識から自分たちの今後

の生き方を考え、提案していくような時間も来年度設けていきたい。

5 活動をふりかえって

私自身も目にすることがなかったアサギマダラ。子どもと共にアサギマダラを見たいという夢をもち、追いかけてきたことが何よりも楽しく、私自身の人生に潤いを与えてくれた。アサギマダラに出会ったときに子どもたちの表情や歓声が忘れられない。ゆうすげと蝶の里の清水さんに、多くのことを教えていただき、なんでも知っている清水さん、地球温暖化など幅広い視野で物事を見つめる清水さんのすばらしさに子どもたちも自己の生き方を見つめている。また、清水さんにたくさん認めていただき、自己有用感の高まりも感じられる。今後もこのわくわく感をエネルギーに子どもと共に夢を追いかけていきたい。

五 研究の成果と課題

- ・毎回の委員会で、各校の実践を発表し、お互いの実践から学ぶことができた。そして、学んだことを自分の実践に活かすことで、子ども達の探究心をより高めることができたと思う。
- ・コロナウイルス感染症が落ち着いたこともあり、昨年度に比べて地域と関わった取り組みも多かった。感染予防のためにICTを活用して地域と関わった実践もあった。そのため、地域題材について知れたことも大変有意義であった。
- ・教育課程の授業校の実践からは、子ども達が地域講師の専門家から蝶について学習し、自ら題材に関わっていく姿からたくさんのことを学べた。
- ・来年度、コロナウイルス感染症が更に落ち着いたら、委員の先生方の授業をお互いに参観しあう機会があればいいと思う。実際に授業を参観することで、子どもの姿から学んでいきたい。
- ・教育課程の午後の会が開催されるようであれば、参集された先生方のためになるような会を委員会として開催できるといいと思う。

